ぜろ・わん・ありす！～幼女が我が家にやってきた～

白城海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぜろ・わん・あります！～幼女が我が家にやってきた～

【Ｎコード】
Ｎ９９７９Ｙ

【作者名】
白城海

【あらすじ】
「わたしの名前は昴谷あります。何のめんしきもない赤のたにんだ！」
「お前は赤の他人にメラゾーマを唱えるのかよ」
「あれは余のメラだ」
「大魔王気取り！？」
突如神名零一の前に現れた幼女、昴谷あります。
彼女の目的はただ一つ。

――零一と淫行する事！

カモンアグネス！やっぱり来ないで。
サモンアグネス！だから来ないで！

自称《何のへんてつもないただの幼女》、ありす。
だが、彼女の行動はつねに規格外。空を飛び、炎を放ち、フリーダムに暴れ回る。

大魔王より傲慢な幼女と、普通を夢見る青年のミサイルより爆発力のあるイカれた日常を描く《全てのロリコンを打ち砕く》ラブコメディ！

1・男と幼女とメラゾーマ

「そこの男、ちょっとつきあいなさい！」

二月の寒空の下、繁華街の路地裏を歩く神名零一（かみなれいいち）は、突然何者かに声をかけられた。

声――それも、幼い女の声。舌足らずで甘く、それでいて、凛とした強さを持った声。

薄汚い路地裏に、その音色は場違いに色を帯びて響いた。

後ろを振り向き、確認する。目に入ったのは少女。しかも、とびきりの美少女が零一を指差し、街灯の上に立っていた。

背丈は零一の胸程度。硝子のように透き通った白い肌。

小さめの顔に不釣合いな、勝気で大きな瞳。

人形のようにきっちりと切り揃えられた、ふわふわの黒髪。その背中の下まで伸びた髪の毛が風に煽られ、ばさばさと靡いている。

だが、端正な顔立ちとは裏腹に彼女の着ているものは何故かブランド物の深い藍色をしたジャージだった。

――誰だ。

尋ねようとした瞬間、少女の指先から火花が散る。火花はぱちぱちと音を立て、やがて拳大の大きさの火球へと姿を変えていく。

危険を感じ、身を引く。同時に、少女の指から放たれる火球。

火球まるで弾丸のようなスピードで火球は零一のそばをかすめていった。

かすめた火球はそのまま地面に激突。

直後、火柱が立ち、地面が沸騰。炎が消えた後に残ったのは、え

ぐれ、土と石が剥き出しになった地面だった。

運よく避ける事が出来たが、当たっていればただでは済まなかったろう。非難の声を上げようとする零一をよそに、少女が街灯から飛び降りる。

怪我では済まない高さ。惨事を想像する零一。だが、予想に反し少女は重力に逆らうかのようにふわりと着地。そのまま言葉を放つ。

「ふっ。それでこそわたしの見込んだ男！わたしの話を聞く権利を与えよう」

明るく、元気な。そして無邪気で、嬉しそうな声。

天使の歌声のような、悪魔の誘惑のような、美しい声。

騙されてはいけない。少なくともこの少女は天使ではない。天使は突然見知らぬ男に闇討ちなどしない。天使は火球も放たない、多分。

「その前に、だ。そもそもお前は何者だよ」

人間、あまりにも異常な事態に遭遇すれば逆に冷静になる。

零一の問いに対し、にやり、と少女が不敵な笑みを浮かべ、答える。

「わたしの名前は昂谷（こうたに）ありす。全くめんしきのない赤のたにんだ」

――マジで誰だ。

喉元まで出掛かった言葉を飲み込む。冷静にならなければならない。

「お前は全く面識の無い赤の他人にメラゾーマを唱えるのか」

ここは日本だ。現代日本だ。ファンタジーではない。漫画でもない。

「だいじょうぶだ」

――何がだよ。

今のは喉ではなく舌まで出て来た。危ない。

「あれは余のメラだ」

「大魔王かお前はっ！そもそも魔法が使えるのがおかしいんだよ！」

今のは喉ではなく、実際に口に出してしまった。

「世の中にはたくさん不思議なことがあるのだ」

「不思議なのはお前だ！」

何故かVサインをしている少女――ありすに向かって叫ぶ。そう考えても不思議なことで済ませていい現象ではない。

「何の用だよ」

気を取り直し、再び質問。

路地裏で一般市民に襲いかかって来たのだ。愛の告白やナンパでない事は明白。一体どんな理由があると言うのだろう。

だが、少女の返答は零一の想像を遥かに超えた言葉。いや、誰も想像できない言葉だった。

「一目惚れした！いんこうがしたい！わたしの　ちつあなに　おまえの　だんこんを　ねじこんでくれ！」

「何でだよっ。何で一目惚れからいきなり淫行になるんだ！おかしいだろ！意味わかんねぇよ！色んなプロセスを飛ばしすぎだっ。月から地球くらいまですっ飛ばしてるじゃねぇかっ！」

気づけば、叫んでいた。

ひとしきり言いたいことを言い切り、残ったのはどういうわけか、いくばくかの満足感。

「そう。これが、彼がツッコミに目覚めたしゅんかんなのだった」

「目覚めて無い。勝手に変な解説を入れるな！」

――これが、運命の出会い。

神名零一と、昂谷ありす。二人の馴れ初めである。

1・男と幼女とメラゾーマ（後書き）

カモンアグネス。カモンロリコン。
もう一本のシリーズも宜しくお願いします。

2・幼女は男の事を考えると病んじゃうくらいデレデレなのです

とにかく零一は移動する事にした。ここは汚く、臭い。買物の近道に利用していただけなのだ。

話を聞かずに逃げる、という手もあったが、後ろから火球で撃たれた果てに火事でも起こされたら困る。

事実、昂谷ありすは、何をしでかすか分からない。

平日の昼下がり、大通りを二人で並んで歩く。しばしの無言の時間。先に口を開いたのはありすだった。

「こうやって二人で並んで歩いていると、恋人同士のようだ」

零一の返事は、無言。不機嫌なのではなく、無視でもなく、どうツッコんでいいのか分からないから。

「しかし、小学生とつきあうのはまずいだろう」

天使のような声で危険な発言をするありす。

その言葉を聞き、ようやく零一は口を開いた。

「その辺に気を使う常識は持ち合わせてるんだな」

平日の昼間から小学生と歩いている男は間違いなく職質対象。おそらく、彼女なりに気を使っているのだろう。

「でもだいじょうぶだ」

ご機嫌な笑顔を零一に向けありすは続ける。

「わたしはどう見ても小学生。だけど…」

「だけど？実は幼く見えるだけで十八禁バリバリＯＫの合法ロリだとでも？」

「実は九才の現役バリバリのロリっ娘なのだっ！」

駄目だろそれ。

深く、深く、嘆息する。続けて、思い切り息を吸い込み、怒鳴る。
「世間に媚びない姿勢は好感が持てるが、それじゃあ色んなモノに引っ掛かるだろうが！」
根本的な解決になっていないではないか。零一が職質されるリスクは欠片も下がっていない。
「俺はロリコンじゃ無ぇ。好きだの何だの言われても困る。諦めろ」
「じ…じゃあ、頼みがあるんだ。手を…つないでほしい」
すっ、と右手を差し出すありす。
「手ェくらいなら、構わないけどよ」
差し出された手を握り返そうとしながら答える零一。その瞬間。
「スキあり！」
白銀の閃きが零一に襲い掛かる。閃きの正体は包丁。ありすが包丁を零一の心臓目掛けて突き刺してきたのだ。
最初からおかしな話だと思っていた。零一に小学生が告白してくる。常識的に考えてありえないではないか。
真新しく、人を殺すのに十分な鋭さを持った包丁は零一のコートを突き破り、皮膚に達し――――なかった。
手の長さが足りないのだ。零一が指をぽきぽきと鳴らし、詰め寄る。
「覚悟は出来てるんだろうなァ？」
「わたしのモノにならないなら、滅ぼすまでっ！」
相変わらずの元気さで白状する。

「滅ぼすって何様だよ！本気でタチ悪いなお前」

気付けば零一は、完全にありすのペースに巻き込まれていた。

2・幼女は男の事を考えると病んじゃうくらいデレデレなのです（後書き）

ヤンデレ？

3・幼女だってメアド交換がしたい！

歩きながら追い払おうともしたが、零一の言葉を聞いているのかいないのか、ありすは延々と彼に付きまとってきた。
相手をすることに疲れ果てた彼は手近なカフェに入る。
大人の多い場所には入り辛い、と言う子供の気持ちを逆手にとった方法だ。

「カフェだ、カフェだ。恋人と言えばやっぱりこういうところだと思うんだ」
堂々と入ってきた。

「お前小学生だろ。学校はいいのかよ」
今日は平日。その上昼下がり。学生は学校に行っている時間だ。もちろん警察官や補導員に見つかればただでは済まないだろう。

「だいじょうぶだ」
ありすは、はっきりきっぱりと言い切った。どうしてこの少女は常に楽しそうなのだ。
「わたしは、とくべつだからな！」
「特別？漫画やドラマで見かける【飛び級で大学まで既に卒業している天才少女】とかか」
ならば納得だ。警官に何か言われても逃れられるだろう。

「わたしはこの世でゆいいつの、自分で学校を休んでもいいと決める事の出来る小学生なのだ」
「ただのサボりじゃねぇかっ。とっとと学校に行けよ！」
席に座りながら堂々とサボタージュ宣言をするありすに向かい怒鳴る。余りの大声に、店内は一瞬の静寂に包まれ、

「申し訳ございません。他のお客様のご迷惑になりますので、少し小さい声でお願いします」
従業員に文句を言われる。
そこはかとなく理不尽なものを感じつつ零一はアールグレイを注文。ありすはクリームソーダを頼んだ。従業員が去った後、ありすが問う。
「おまえだって、こんな平日の昼間からふらふらしてるじゃないか」
もっともだ。普通は平日に休みでもない人間はろくな奴ではない。
「お前、じゃない。神名だ。神名零一。俺は今日が休みなんだよ」
名乗って、後悔する。零一はありすと仲良くなりたい訳ではない。追い払いたいのだ。
名乗ると言う行為は二人の仲が進展した事と勘違いさせてしまうのではないか。

「そうか。れーいちか。だがだいじょうぶだ。れーいちが無職のかいしょうなしの童貞でも、わたしはかまわないぞ。わたしはれーいちのおくさんだからな」
「人の話を聞けよ！後、童貞は関係ないだろ！？」
勘違い以前に既に嫁気取りだった。しかも名前で呼んできた。さらにありすは続ける。
「だいじょうぶだ。わたしがやしなうし、童貞ももらう」
「どこも大丈夫じゃねぇっ。どうやって小学生が働くんだよ！」
行為も言動も全てが規格外すぎるありすに、常識的な疑問をぶつける。
どんな非常識な回答が来ようとも毅然と跳ね除ける覚悟を決める零一。
だが――
「こんなに誰かの事が気になったのは初めてなんだ。愛していると言ってもいい。好きな人のためには、どんなことでも、何でもして

あげたい。それは当たり前の感情だろう？」
絶句。年端もいかない少女が無償の愛を語った事に。
愛と言う神名零一からもっとも遠い言葉を耳にした事に。常識的な言葉を余りにも非常識な人間が口にした事に。
零一が言葉を失っている間に、注文した飲み物が到着。気持ちを落ち着かせるために、煎れたてのアールグレイを口にする。店員は諦めたのか、大声で騒ぐ二人には何も言わなかった。

たっぷりと間を開け、零一が言い放つ。冷たく、無機質に。
「俺はこんなに人の話を聞かない奴は初めてだ。帰れ」
完全な拒否。全てを拒絶する壁を零一は言葉と態度で作り出した。
その壁に気づき、ありすは少し悲しそうな瞳で、言う。
「れーいちは、迷惑か？」
「俺じゃ無くても、迷惑だ」

壁は作った。後は、ありすの言葉に耳を傾けず全て無視するだけでいい。
彼女が何を言おうと関係ない。零一が作りだした心の壁は、何者にも破壊されたことがない。
彼はそうやって生きてきた。何者にも心を開かず、何者にも興味を示さず。

しばしの沈黙の後、ありすが口を開く。零一が想像もしない言葉と共に。

「そうだな。とつぜんわたしのような美少女に言い寄られて困らない人間などいまい」
「そうじゃないからな！？論点が次元を超えたレベルでズレてるんだよ！」
全てを拒絶する壁は、あっさりと次元ごと崩壊した。

「確かに、わたしも突然すぎると思うんだ」
「ようやく常識に目覚めたか。諦めろ」
　零一は十八歳。ありすは九歳。家族でもない二人が一緒に居て良い理由が無い。
「仕方がない。今日はメアドと、ケータイ番号と、住所と、婚姻届だけでがまんしてやろう」
「何でそうなるんだよっ。何様だよ、お前！」
絶対に連絡先は言わない。とも付け加える。

「ならば、大声でけいさつをよぶぞ」
「アレだけやりたい放題しておいて最後は警察頼みで脅迫だよ！面倒臭ぇ。マジで面倒臭ぇっ」
　灼けるように熱いアールグレイをやけくそ気味に一気にあおる。この少女に言葉は通じない。そう結論付け、無視して帰ろうとした零一にありすは告げる。
「わたしだけが、ようきゅうするのもおかしいと思う。れーいちは、何か希望は無いのか」
「俺の希望は一つ。【放っておいてほしい。】ただそれだけだ」
そう答え、立ち上がる。話は終わりだ。

「わたしと結ばれれば、れーいちにも良い事があるぞ」
「良い事？どうせロクでもない事だろうが、最後に聞くだけ聞いてやるよ」
「わたしのはんりょとなれば、淫行し放題！わたしもれーいちを手に入れられて、みんなしあわせ！」
「俺は淫行とか要らねぇよ！その時点で間違ってるからな！？」
　夢見る少女の瞳。しかし発せられた言葉は淫行。想像以上にロクでも無かった。

「じゃあ、どうすればいいのだ」
「どうもこうも無い。帰れ。帰ってくれ。頼むから」
もはや涙目で立ち去ろうとする零一。そして彼を引き留めようと声をかけるありす。
「どうしても、だめなのか？」
「どうしても駄目だ。俺は警察に捕まりたくなんか無い」
そう伝え、零一は伝票を摘み、レジへと歩き出す。
「仕方がない。さいごのしゅだんだ」
「…最後の、手段、だと」
嫌な予感がする。違う、嫌な予感しかしない。

「たいへんだ。たいへんなロリコ――むぐっ」
危険な発言をする前にアリスの口を手でふさぐ。
二人の距離は数メートル程離れていたはずだったが、零一がありすに近づいた姿を視認出来たものは皆無だった。まさに神速、まさに神業。
「わかった！メアドだけなら交換してやる。だから黙れ、黙れ。な？」
もしかしたら俺はこの少女から逃げられないのかもしれない。と、本気で不安になる零一。

もちろん、彼の不安は的中する。

それも、常識を超えた形で。

3・幼女だってメアド交換がしたい！（後書き）

真面目に幼女萌えを目指しています。

4・ストーカー?幼女がやるから法的にも犯罪じゃないんです

零一はありすとメールアドレスの交換をした瞬間、獣のような速さで逃げだした。

追いつかれないようういくつもの路地を駆け、潜り抜け、そこでようやく足を止め一息。

そのまま駅に向かい、不必要なまでに電車を乗り換え自宅近くの最寄り駅に到着。

全ては昂谷ありすの追尾を逃れるためだ。怖いので携帯電話の着信などは確認していない。

苦労の果てに零一が自宅の前にたどり着いた時には、既に日が暮れていた。

木造平屋。築二十年の一戸建て。生まれた時から住んでいる家。一人で暮らすには広すぎる空間。だが、五年も一人で使っていれば慣れてもくる。

玄関のカギをかけ、真っすぐ自室へ向かう。

今日は疲れ果てた。もう何も考えたくない。

「何だったんだよ。さっきのガキは。何年か経てばとんでもない美少女になるだろうが、小学生は無いな」

小学生以前に人間かどうかすら怪しい。

人の魂を啜り、肉を食らって生きていると言われても信じてしまいそうだ。

魔法を操り、傍若無人。育てた親の顔が見てみたい。

「今日はもう疲れた。寝よう」

着替えもせずに、そのままベッドに潜り込もうと布団をめくる。

「添い寝なら任せろ！」

なんかいた。

無言でめくった布団を元に戻す。何も見なかった事にしたい。
見なかった事にすれば無かった事に出来るに違いない。

「疲れてるんだな。疲れてるから幻覚を見るんだ」

もう一度、布団をめくる。

「疲れているのなら、やはり添い寝だな。いい夢が見れるぞ。ついでに淫行もしよう」

やっぱり何かいた。

全てを諦めて、【何か】を【昂谷ありす（全裸）】と認識する。
そう。

あ り す は 全 裸 だ っ た。

慌てて目を逸らし、零一が叫ぶ。
「どうやって入って来たんだよ！」
メールアドレスしか教えていないはずだ。尾行も撒いたはずだ。
鍵もかかっていたはずだ。
なのに、何故彼女はここに居る。

「金と、こねと、メアドと、名前があれば、住所をさぐることなど、ぞうさもない」
「何でそんな自慢気なんだよ。全てにおいてお前の実力と関係無ぇだろうが！」
「そんな事はどうでもいい。今、ここは二人の愛の巣。とろけるほど愛しあおう。さぁ」
のそのそと布団からはい出てくる。飛び出してこないのは寒いからだ。間違いなく。

「や、やめろ。近づくな」
「断る」
零一の拒絶をありすは許さない。小さく、華奢な体からは想像できないほどの凄まじい腕力で布団に引きずり込まれる。
「こ、声を出すぞ」
腕を零一の首に絡め、唇を奪おうとしてくるありすに警告する。顔が近い。近すぎる。
あと数センチ近づくだけで唇は触れあうだろう。
「出してもかまわない。だが、たいほされるのはれーいちだ」
零一の家に全裸の小学生がいる。警察が見たらどう思うだろう。想像したくもない。
そんな想像よりどうやったらこの状況を切り抜けられるかを必死に考えるべきだ。相手は子供、変人、全裸。

――全裸。そうだ。全裸だ。
零一は、キスをしようと力を緩めたありすを振り払い、窓に向かう。そのまま窓を一気に全開へ。吹きこむのは二月の冷たい風。
「ひぁっ」
その寒さにたまらず布団の中で丸まるありす。勝った。心の中でガッツポーズ。

「話し合おう。まずはそこからだ」
力ずくでの《説得》は無理。能力では勝ち目が無い。話術だ。
交渉で落とし所を見つけて、今日は帰す。
その後の事は明日起きてから考えればいい。今を乗り切る事が最も大事だ。

「そんなにあせって。わたしのみせいじゅくなカラダにこうふんしたのか？」
布団から頭だけを出してありすが言う。まずい、話がかみ合っていない。日本語が通じていない。通じる気がしない。
交渉になるかどうかすら怪しい。だが、零一は折れそうになる心を必至で奮い立たせ言い返す。
「違ぇよ。塀の向こうに行きたくないだけだよ！分かれよ。分かってくれよ」
この齢で前科を負いたくない。必死の願い。もしかしたら涙を流していたかもしれない。人間は自分の限界を超えると悲しくも無いのに涙が出るのだな、と場違いな事を考える。

「とにかく、今後の事を話し合おう。まずは服を着るんだ」
「今後の、事？」
何を想像したのか、ありすは満面の笑みを浮かべ、再び布団にもぐりこむ。三十秒ほどごそごそとした後、
「着たぞ。まずは結納の話からだな」
と言いながら布団から姿を現す。先程のジャージ姿だ。
これで交渉が再開できる。零一はそう思っていた。思っていた、のだが。

――体が勝手に動いた。勢いをつけ、零一はありすの手を取る。

「何をする。そんな強引な。はずかしいぞ」
顔を赤くするありすの腕を掴み、抱え、そのまま全開の窓から投げ捨てる。
「な…きさま。はかったな…はかったなぁぁぁぁぁ！」

ドップラー効果を残しながら夜空の彼方へ消えていくありす。彼女の事なので死にはしないだろう。
星になったのを確認した後、窓を閉め、施錠する。
当初の予定通りとはいかなかったが、危機は去った。
逆上したありすが零一の家に放火することも考えられたが、その時はその時。

潔く死のう。

ロリコンのレッテルを張られ社会的に抹殺されるよりは、実際に死んだ方が多少はマシだ。

そう、零一は勝ったのだ！解放されたのだ！

４・ストーカー？幼女がやるから法的にも犯罪じゃないんです（後書き）

良い子のみんな。０・１・ありすは《全年齢向け》だよ！
来いやアグネス！やっぱり来ないで！

あと、メインで書いてる《記憶探偵》もどうぞよろしく。

5・締め出されたらこの方法で家に入ろう（前書き）

門限破りで家から追い出された時のための対策・実用編

5・締め出されたらこの方法で家に入ろう

ありすの追放に成功した後、零一が最初にやった事は戸締りだった。

玄関にチェーンをかけ、雨戸も釘と金槌で完全に塞ぐ。

誰も入って来ることが出来ないように。全ての作業が終わったのは、深夜にも近い時間帯だった。

肩で息をしつつ、自室に戻る。早く眠りたい。汗だくではあるが、シャワーを浴びることすら拒否したいほどの疲労。

ベッドに潜り込もうと、布団をめくる。

「そんなに照れなくてもいいのに。ここには、わたしたちしかいないのだから」

また何かいた。また何かが喋った。ホラー映画だ。零一が叫ぶ。

「どこから沸いてきやがったぁぁぁぁぁぁ！」

これではまるで幽霊かボウフラではないか。少なくとも人間ではない。施錠され、窓のふさがれた住宅に何の痕跡も残さず侵入できる人間など存在しないはずだ。

「かんたんなことだ。種明かしをしよう」

人差し指を立て、いつもの邪気の無い笑顔でありすが言った。どうやら何らかのトリックがあるようだ。

「聞くだけ聞いてやる」

聞いたらその手段を塞いでやる、と心の中で付け加える。

「れーいちの家は、【木造平屋】で【一人ぐらし】だろう？」
「あぁ。親が海外赴任だからな」
事実、である。零一の両親は中学生になったばかりの零一を一人残し、海外へ旅立った。
生活費は振り込まれているので生きてはいるだろう。だが、連絡は取っていない。とり方すら知らない。
思考が脇道にそれた零一をよそに、ありすが言葉を続ける。

「そこに、【穴】がある」
「穴…？セキュリティホールって奴か」
思考を本筋に戻し、答え、考える。木造平屋に一人暮らしでいる事にどんな穴があるのだろう。
想像を巡らすが何も思い浮かばなかった。思案顔の零一に向かってありすが続ける。

「その【穴】をりようし、わたしの部屋からワープホールを」
「待て」
何かおかしい単語を拾った気がする。気のせいか。
「今、何て言った」
「わたしの部屋から、れーいちの部屋にちょくつうの、ワープホールを作った」

気のせいではなかった。

「何で平屋戸建てのセキュリティホールからワープホールを作るっていう発想になるんだよ？おかしいだろ！」
確かに目を凝らしてみると、開いたクローゼットの中の空間が歪んでいる。クローゼットに入っていた衣類はどうなったのだろうか。嫌な想像しか浮かばない。そしてワープホールだかセキュリティホールをふさぐ方法も浮かばない。

「ともかく、これでいつでも夜ばいかけほうだいだ！良かったな、れーいち」
「ちっとも良くねぇ。閉じろ。今閉じろ。いや、帰れ、閉じる前に帰れ。帰ってから閉じろ」
一気にまくしたてる。もう限界だ。色んなものが既に限界だった。

「こうなったら親御さんに直接回収してもらう。穏便に済ませてやろうとしたがもう知らん。手段は選ばんぞ」
　ワープホールから直接ありすの家に侵入し、彼女の両親と直談判する。それしかない。ありすが通り抜けてきたのだから、零一も通れるはず。
「って、通れるわけ無ぇよ！なんだよワープホールって。そんなモノに飛び込む覚悟があったらこんな事になって無ぇよ！」
「どうしたのだ。急に一人でしゃべりだして。まさか、とうとう伝説の【セルフツッコミ】に覚醒めたのかっ？」
「覚醒めて無ぇ。なんだよ【覚醒めた】って。能力バトル漫画か！ツッコミは能力じゃ無ぇよ！」
「しかし、りょうしんのことなら、だいじょうぶだ」
　零一が頭を抱え喚き散らす中、ありすは言う。《だいじょうぶだ》が口癖なのだろうか。

「すでに、りょうしんこうにんの仲だからな」
　凄いだろう。と、ふんぞり返っているありす。頭痛に襲われる零一。
「自由すぎるだろ！どれだけ放任主義なんだよ。それになぁ、小学生のガキが見知らぬ男の家に外泊だなんて、駄目だろう？」
　深まる頭痛の中、理性を保ち、必死に、そしてできるだけ優しく諭す。
「だいじょうぶだ。この家は、すでに家具も、土地もばいしゅうし

てある。今はわたしの家だ」
懐から書類の束を取り出すありす。権利書だ。それも本物。零一の両親の実印もある。
「どこも大丈夫じゃねぇっ。どれだけ権力を持ってるんだよ！常識的に考えておかしいだろ！？」
「炎やワープホールをあやつる小学生に、今さらじょうしきをとかれても…」
「あああああああぁぁぁあぁぁぁ！！はいはいそうですよ！おかしいのは俺の頭だよ！これで満足か！」
襲い来る頭痛を吹き飛ばすために、零一はただ叫ぶしかなかった。

6・約束を反故にした場合、契約により手指の切断・万の拳骨・そして千本の針

ひとしきり叫び、暴れ、のたうちまわった零一にありすが問いかける。

「わたしは、こんなにもれーいちを愛しているのに、どうしてだめなんだ」

「倫理観ッ！法律違反ッ！犯罪ィィィィ！」

寂しさを帯びた瞳で問いかけてくるありすに、零一は叫び声で返答する。頭を抱え、床の上を転がりまわりながら。

「よし。それをクリアすればいいんだな。少しまっているがいい」

そう言ってクローゼットの中に飛び込むありす。

空間の歪みに消え去った彼女を見て、零一はようやく冷静になる。

「まさか、成長促進装置とか、そんなものがあるのか？」

あの少女ならあり得ないとも言い切れない。成長したありすを想像すると少しばかり胸が高鳴ったが、中身があのままだと言う事に思い至り、再び頭痛。

ありすは世間の常識と言うハードルを越えるどころか、全て叩き壊して零一のもとに進んできている。彼女の先端にはドリルでも付いているのではないだろうか。このまま押し切られ、貫かれそうな自分が恐い。

不安な未来に思いを巡らせていると、ありすが戻って来た。

「またせたな。これでだいじょうぶだ。淫行しほうだい！」

零一は言葉を失い、目を見開く。

小学生と付き合うことを許さないと言う世間の常識、倫理観、法律。その全てをクリアすると豪語し、ワープホールに消えて言ったありす。

戻って来た彼女の姿は、零一の想像を絶するものだった。

「どうして…」

言葉を絞り出す。声がかすれているのが自分でも分かる。

「見ちがえただろう？これが生まれ変わったスーパーありすだ」

生まれ変わったスーパーありすが、先程と同じ口調で言う。

理解不能な事態。だが、零一はどうにか叫び声を出す事に成功した。

「何一つ変わってねぇよッッ！」

1ミリたりとも何も変わっていなかった。

華奢な体躯も、くりくりとした勝気な瞳も、ふわふわの髪の毛も、凹凸のないプロポーションも、藍色のジャージも、何もかも。

だが、ありすは予想済み、とばかりに笑いを上げる。

「ふっふっふ。それがれーいちのあさはかさよ」

どうやら何かは変わっているらしい。零一には全く分からないが。

「どこが変わったんだよ」

素直な疑問を口にする。馬鹿には見えない成長？そんな事を言ったらどつこう。心に決める。

「こせきじょうでは、もう二十二歳！」

戸籍改ざん。ただの犯罪行為だった。

「俺より年上かよ！」

彼自身気づいていないが、もはやツッコミのピントが外れている。

「どうだ。これで問題ないだろう。さあ、婚姻届にサインを」

えっへん。とばかりに平らな胸を張るありす。
「問題だらけだよ馬鹿野郎」
「なぜだ。これでもう、れーいちがけいさつにつかまる事はないんだぞ」
「そう言う話じゃないだろうが。まず小学生とは結婚できん」
ついでに、未成年である零一も両親の許可が無ければ結婚できない。そんな事はこの際問題にすらならないが。
「だいじょうぶだ。こせきじょうはもう、二十二歳。法的にもまったく問題ない」
そうだった、と舌うちする零一。
筋の通った言い分を他に考えなければならない。
筋の通った、と言う考えが根本的に間違っている事に気づくべきなのだが、彼は未だにありすを論理で追い払おうとしていた。

しばしの熟考。
ここからは一つでも言葉や会話の誘導を間違えたら、即座にゲームオーバーの地雷原だ。
慎重に言葉を選びながら零一は口を開く。

「俺たちは今日出会ったばかりで、お互いの事を何も知らない。それなのに結婚や淫行というのはおかしいと思う」
だから、ありすとは付き合えない、と続けようとする零一をありすが遮る。
「そうだ。ではデートしよう。デートでお互いの事を知ろう。そのあと淫行して結婚だ！」

――あれ。もしかして俺、地雷を踏んだ？

あえなく爆死。と思えたが、何とか零一は踏みとどまっていた。
既に満身創痍だが。

「お前はジャージでデートする気か。服装にも気を使えない女なんざお断りだ」
少々きつい言葉。本心ではない。零一は他人の服装など気にしない。
そもそも、他人を気にしない。干渉しないし、干渉もされたくない。傷つけるのも、傷つけられるのも、御免だ。
自分の殻にこもっている方がずっと楽なのを知っている。
今までありすを傷つけないような言葉選びをしていたが、もう止めだ。彼の我慢にも限界がある。

「オシャレと言うのは、他人の目を気にするからするものだ。わたしは見た目で評価するような人間の目など気にしない。だからこの姿だ」
強がりの言い訳にも聞こえる言葉を、自信を持って断言するありす。

だが、零一が彼女にかけたのは冷たい言葉。

「ご立派な事で。だが俺は見た目で気にするんだよ。だから帰れ。失望しろ。そして失せろ」
きっぱりと、拒絶。
確かに、ありすの美貌は並外れている。過去に妙な大人に不快な行為をされた事でもあるのかもしれない。しかし、そんな事は零一には関係ない。
「理解したか？いや、理解しろ」
とどめの一言。泣こうが、暴れようが、燃やされようが関係ない。もう何もかも零一にはどうでもよかった。

「…りかい、した」

うつむき、答えるありす。声も、体も、震えている。それほどのショックだったのだろう。好きな者に完全に拒絶された事が。零一には、その痛みが理解できる。彼は拒絶される痛みから逃げるために他人との干渉を断ったのだから。

「あぁ。りかいしたぞ！」

ありすが顔を上げ、言う。その表情に曇りや陰りはない。出会った時と同じ天真爛漫な笑顔。零一の心の壁をこじ開ける、あの笑顔。

「たしかに、れーいちの言うとおりだ。好きな人といっしょに歩くのに、オシャレをしないのはおかしい。わたしはどう思われても平気だが、れーいちの隣に居るのがジャージ女というのはダメだ。やはりれーいちはわたしの見込んだ男。昂谷ありすはレベルアップした！」

どうやら零一は二個目の地雷を踏んだようだ。ゲームオーバーまでの残機数は後いくつだ。リセットボタンはどこだ。　周囲を見回し、探すが、見つからない。見つかるわけが無い。この部屋にあるのはベッドと時計だけなのだから。

「よし、ならば買い物だ。明日は買い物デートだ」

「明日？」

明日、と言う単語に突破口を見つける零一。どうやらまだ残機は残っているようだ。

「明日は無理だ。俺は明日から仕事がある。しばらく休みは無い」

事実。零一の働く《事務所》は激務かつ人手不足、メンバーの中でも重要な立場にある彼に休みはほとんどない。

このまま仕事を言い訳にして、うやむやの内に消滅させてしまおう。

どうせ相手は子供だ。愛だの何だの言っているが一過性の物。すぐに冷めるだろう。

「悪いな。時間があれば付き合ってたかも知れないが、俺にも生活がある。また今度な」
終わりだ。とばかりに手を振る零一。明らかに棒読みだった。だが、
「だいじょうぶだ！れーいちのしょくばに電話して、今日付けでクビにしてもらった。これでデートができるぞ」
「ふざけるなあぁぁぁぁぁぁ！！」
失念していた。彼女が戸籍を改ざんした事を。彼女が零一の家の土地も、家具も全て買収した事を。そして、彼女の非常識さを。

一筋の望みを胸に抱き、携帯電話を取り出し職場に電話をする。2回のコールの後、陰気なスタッフの声。
「はい」
「俺だ。神名だ」
名乗った瞬間にぷつん、と言う音が不快に耳をつく。
その後、残されたのは無機質な不通音。零一と確認した瞬間に切られた。
一体この少女は職場に何をしたというのだろうか。
もう、観念するしかなかった。零一の敗北。ぐうの音も出ないほどの完敗。
敗北を認めると同時に、零一の心に変化が生じる。

――諦めて一日くらい付きあってやるか。

仕事に苦痛を感じていたのも事実だ。休日も無く、睡眠時間もまともに取れない激務。命を落とした同僚もいた。期せずしてクビと言う事になったが、羽休めにはちょうどいい。
一日くらい、子供の遊びに付きあってやるのもいいかもしれない、とも思う。

「分かったよ。明日だけなら付き合ってやる」
冷静さを失った零一は気づいていない。気づく訳もない。
世間ではそれを「血迷った」と言う事に。

7・夢のようなシチュエーションだろう？さぁ、喜べ

―　2　―

子供のイジメに理由は必要ない。人より少し体が大きい。人より少し内気。人より少し体が強い。人より少し太っている。何でもいいのだ。

幼い零一は、そんな【何でもいい】イジメの対象になっていた。

賢い彼は、自分が反撃した結果が、どうなるかも理解していた故に、耐えた。耐え続けた。

だが、ある日、我慢の限界が来た。

爆発した怒りは、イジメの主犯格に向かい、相手を血まみれにした。

相手の怪我は、零一の受けた心の傷より遥かに浅いものだったが、世間は零一を許さなかった。

日々襲い来る、突き刺さるような非難の嵐。耐えかねた彼の両親は海の向こうに逃げた。二人きりで――息子を捨てて。

どこを見ても味方がいない中、零一はゆっくりと世界から心を閉ざしていった。

■

翌朝、土曜日。午前八時。

神名零一は悪夢にうなされ、目を覚ました。

酷い悪夢だった。悪魔のような少女が、彼のもとにやって来て、常識や倫理のことごとくを叩き壊していく夢だ。

夢に出てきた少女の姿を思い出す。
ふわふわの黒髪で、透き通るような白い肌の少女。そう、たった今自分に覆いかぶさるようにして眠っている少女のような。

数秒、思考が凍る。

「夢じゃなかった。悪夢は続いている」
昂谷ありすが、零一に抱きついてすやすやと寝息を立てている。
いつの間にこの少女はベッドから移動してきたのだろうか。
引き離そうにもがっしりと掴まれていて、起こさずに逃げ出す事は不可能に思える。
しばらく待ってみるが、ありすの穏やかな寝顔を見る限り目を覚ます気配はない。意を決して声をかける。
「おい。起きろ。目を覚ませ」
ぺちぺちと頬をたたく。
「ふにゃぁ」
妙な鳴き声を出すありす。続けて頬をつまむ。
「びろーん」
頬が30センチほど伸びた気がした。
「きっと目の錯覚だ…」
錯覚だと思いたい。錯覚であってほしい。

「うー。寝てるわたしにイタズラしたのかぁ？れーいちぃ」
寝ぼけた声で問いかけられ、焦る。
「だいじょうぶだ。わたしも寝ているれーいちに、イタズラしたからおあいこだ」
「待て、何をした？イタズラって何だ。嘘だろ？嘘と言えよコラ！」
ありすの【イタズラ】。想像するだけで恐ろしい。

きっと、今のはありすの冗談なのだ。
そう思い込む事にする。自分の口元から他人の涎の匂いがするのも気のせいに違いない。

零一の問いかけに全く反応の無いありす。
諦めて、無理矢理に腕をひきはがし、ソファから立ち上がる。
ありすに布団をかけるのも忘れていない。

「メシ、作るか」
もちろん二人分。誰かのために手料理を作る。零一にとって、それは初めての経験だった。

■

生まれて初めて誰かのために作った料理は、おおむね好評だった。
「おいしい」
何でもないたった一言。世間では、当たり前のように使われている単語。
だが、零一にとっては、漫画や小説のような物語にしか存在しないと思うほどに遠い世界の言葉。
その言葉は彼に今まで感じたこともない温かな感情を与えた。

「れーいちは、いいおよめさんになるな。もちろん、わたしの、だが」
ワイドショーで怪奇生物のニュースを流す中、ありすが言う。
「その年で家事放棄かよ。許さんぞ」
テレビは腕や頭がいくつもある怪物の写真の映像に切り替わる。
食欲を失いそうになった零一は、リモコンでチャンネルを変更する。
「それは、いっしょに住むと認めたと言う事でいいのだな？」
「認めない。よくない。許さない」

チャンネルの変更先では、遺体の消失事件の報道。うんざりした表情を浮かべ、零一はテレビの電源を落とす。
最近、このような怪奇事件のニュースが非常に多く気分が滅入る。零一はオカルトの類が苦手なのだ。
嘆息する零一をよそに、ありすが嬉々とした表情で話を再開。

「いっしょに住むなら、やはり家事は分担だな。れーいちがご飯とそうじと、せんたくだ」
「全部じゃねぇか！お前は何をするんだよ」
「もちろん、夜のあいてだ」
「やかましいわっ！」
掛け合いをしつつ、食事は無事に終了。昨日と比べたら平和なものだ。と、安堵する。

昨日と比べている時点で、自分の中の常識がズレている事には気づいていない零一なのであった。

7・夢のようなシチュエーションだろう？さぁ、喜べ（後書き）

ほのぼの。

8・浜辺の鬼ごっこ。それは乙女のデスティニー

午前十時。色々と悶着はあったものの、準備を終え二人は家を出る。

行き先は、駅ビル内の大型スーパー。食料から衣料品、日用雑貨など一通りそろっているのが理由だ。

二月の風はまだ冷たく、並んで歩く二人の両手はポケットの中に入っている。

零一は白のダウンジャケットを羽織っているが、それでも寒さは感じる。

「デートと言えば、やはり手をつなぐ事だと思うんだ」

手を差し出しながら、笑顔でありすが言う。昨日と同じブランドのジャージ姿。違いと言えば、昨日は藍色で、今日は赤、と言う程度。寒くないのだろうか。

「そんな義理は無い。そもそもデートじゃないんだからな」

手をポケットの中に収めたまま答える。

「そんなことを言っても、いいのか？」

仏頂面の零一に向かって、にやりとした笑顔でありすが言う。付き合いは短いが分かる。この笑顔はよからぬ事を考えている笑顔だ。

「知らん。何を考えていても無駄だ。買い物に行く前に預金残高の確認もしなきゃならんし、やる事は多いんだよ」

毅然とした態度で要求を突っぱねる。だが、ありすはお構いなし、と言った態度だ。

「これだから無収入のむしょくは…」

「元凶が言うとイラッと来るな。とにかく、手は繋がん」

話は終わりだ。とばかりに、早足で歩を進める零一。

「ふふふ。れーいちがかくにんする通帳は、これだろう」
悪戯っぽい笑みを浮かべアリスが取り出したのは、零一の通帳だった。
「お前の懐は四次元ポケットか。返せっ」
取り返そうと手を伸ばす零一。避けるありす。そのまま通帳を懐に収め――
――宙に浮かび、逃げだした。
「ほぉら。つかまえてごらんなさい」
「どこのお嬢様気取りだ。待て、待ちやがれ！…って、空！？飛ん…えぇっ！？」
どこからツッコめばいいのかわからない。
零一は追いかける。からかっているのか、ありすの速度は零一の走る速さと同じだ。

「ふふふふ。れーいちの物は私の物。わたしの物はれーいちの物」
「微妙に対等なのがムカつくんだよ！クソッ…返せっての」
逃げるありす、追う零一。
唐突に始まった鬼ごっこの終わりは、二人が駅に到着した時だった。
通行人が注目する中、ありすが急停止し、着地。懐から通帳を右手で取り出し零一に差し出す。そのまま腕を伸ばし奪い返そうとする零一。

「何で、こんな事をしたんだよ…って、え？」
気づいた時にはもう遅い。ありすは、空いている左手で、零一の伸ばした手を握っていた。
「ふふふ。手はにぎらせてもらった。大勝利だ」
呆れる。全ては零一の手を握りたいがためだけの策略だったのだ。その為だけに、通帳を隠し持ち、空を飛んだ。動機も、手段も、結

果も、何もかもが無茶苦茶。何もかもが規格外。

「お前、アホだろ。何が大勝利だ」

通帳を受け取りポケットに収納。そして、そのままポケットから手を出しありすに差出す。

「あぁ、もう。勝手にしやがれ。だけど、これ以上は暴れるんじゃねぇぞ」

差出された手を握り返すありす。

その表情は、これ以上ないほどのご機嫌な笑顔だった。

8・浜辺の鬼ごっこ。それは乙女のデスティニー（後書き）

ラブコメっぽくしてみた。スレにはない完全なオリジナル展開。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9979y/

ぜろ・わん・ありす！～幼女が我が家にやってきた～

2011年12月8日01時57分発行